

後期ドリュ・ラ・ロシエル像の確定に向けて

有 田 英 也

1 作家形成という神話

一作家の全作品を、展開するひとつの運動に見立てようとするれば、おのずと習作に始まって主著に至る道程を描くことになり、そこから逸れた部分が軽視され、個別の作品においても相前後するテキストとの照合が強調されがちになるだろう。これを目的論的合理主義に目を眩まされた錯視とすることもできる。作家は明確なプログラムを持って生まれるわけではないからである。

だが、もし全作品を読むことができ、しかも当の作家の仕事のいくつかが確かな個性と完成度を有しているなら、作家がどのようにしてそこに至ったかを跡づけてみたくなる読者もいるだろう。ドリユ・ラ・ロシェル Drieu la Rochelle, Pierre (1893-1945) の場合、「いかにしてそこに」といふかるのは、何も専門研究者に限るまい。

ドリユはフランス人としてはきわめて早い 1934 年 3 月時点で、「国民的で社会主義的でしかありえない」党を待望し、同年末の著作で「ファシスト社会主義」を標榜した⁽¹⁾。彼は人民戦線運動に先駆けて極右と非共産党系左翼の結集をはかり、後に人民戦線そのものの敵手となった。そして、10 年後、第二次世界大戦中のパリで、占領ドイツ軍の文化政策に協力したのみならず、ナチス・ドイツの敗色が濃くなっても協力メディアへの寄稿をやめずに国内にとどまり続け、ついにパリのドイツ軍がひそかに撤退を始めた矢先の 1944 年 8 月 11 日に自殺を試みた。このように、ドリユの「いかにしてそこに」は、レジスタンスと国際共産主義という、1930 年代から 60 年代にかけてのフランス知識人の言動を刺激した立場に対して、みごとなまでの陰画である。ナチス・ドイツとファシスト・イタリアを仮想敵国とする 1930 年代

後期ドリユ・ラ・ロシュ像の確定に向けて

のフランスで、いかにしてファシスト作家が形成されたのだろうか。

この問いにドリユ自身が真っ先に答えようとした。彼は 1934 年刊の『ファシスト社会主義』以降の政治評論集 5 冊のすべてで、他の要素にましてファシスト性を際立たせている。みずからの政治的立場を主張することにおいて、この時からドリユは明瞭に一貫性を示しており、これから見るようにそれ以前の政治評論と対照をなしている。

しかも、作家自身が主著と見なした小説『ジル』(1939) は、分身とおぼしい主人公がファシストになるまでの軌跡をたどった一種の成長小説(教養小説)である。ファシズムについて「いかにしてそこに」と問うことは、ドリユ作品を読む者だけでなく、作家にとってもそれほどまでに重要だった。そのため、彼の 41 才のファシスト宣言が、あたかも遅れてきた自己形成であったかのように読める。少なくとも、ドリユの精神の隠された一面は、歴史と出逢って初めて表現されたといえる。ただ、その歴史がナチス・ドイツの政権奪取に還元できるかどうかは別稿で考えたい。

さらに、自己形成の自問そのものは、一般に作家が創作キャリアの暮れ方で自伝に手を染めて、「わたしはいかにして作家になったか」とつぶやくのにも似た、ありふれた問いに変奏されうる。ニーチェの『この人を見よ』のようにパロディ化するにせよ、全集出版にともなう営業の擬装であるにせよ、作家形成は作家の自伝の不変の主題であろう。ならば、ファシストを宣言して以降のドリユは、政治評論も書く小説家として、書く行為に凄みを与えたくて、何らかの必然性の相のもとに政治的選択を描き出したのではないか、という仮定も成り立ちうる。

ところが、ドリユ・ラ・ロシュは、その 30 年近い作家キャリアにおいてたびたび全作品をふりかえり、みずからの作家活動を回顧的展望のうちに

意味づけてきた。その行為は、『ジル』の出版に際して初期著作集に手を入れたり、これまで2作の上演が成功とは言いがたかった劇作を試みたりといった、主著以降の「後期」ないし「晩年」をにらんだものではない。ドリュは人生の節々で、そのつど主著を書き終えた作家を演じ、新たな「後期」ドリュ像を演出してきた。

たとえば、二冊の詩集を公にした後の1921年（作家28才）に、彼は翌年の評論集『フランスの測定』の出版を期して、自伝的エッセイ『戸籍』を出版している。その最終章には次の一節が読める。

「ぼくがこう書くのは、自分自身を厄介払いしたいからだ。いや、とりわけかつての自分、ぼくの人生の門出にちょうど一致したある種の戦争（une certaine guerre）のあいだの自分と手を切るためなのだ。」^②

厭わしい自分とは、この作品で「想像力」ないし「ロマンティズム」と呼ばれる夢想的な冒険心のことである。「子供は行動より先に思考を知る。ぼくは、物心がつくとすぐに、思考をそれ自体で十分な富を見なし、そこに閉じこもって、この隠れ家で悠然と歩く癖を身につけてしまっていた。」^③ 普仏戦争を経験した母方の祖父母から、真綿にくるむように育てられた著者自身（「ある敗北の孫」）が、冒険家の夢を育んだ。回想の対象は、居間で一人遊んだ戦争ごっこからダヌンチオ、キップリング、ニーチェなど愛読書にまで及び、第一次世界大戦までの感情教育の全域を覆う^④。ドリュはこれから作家として立つために必要な助走として、このロマンティズムを放逐する若書きの自伝をものした。

7年後、アラゴンらダダイストと決別し、エマニュエル・ベルルと雑誌『デルニエ・ジュール』を7号まで出して休刊したドリュは、長編政治評論『ジュネーヴかモスクワか』（1928年）を世に問うた^⑤。その自著序文は過去

後期ドリユ・ラ・ロシエル像の確定に向けて

の交友を振り返り、また学生時代から愛読してきたバレスとモーラスの著書を批判的に検討している。1893年生まれのドリユの思想形成には世代に共通する要素もあるので、やや長めに引用しよう。

「ぼくは、アクション・フランセーズの社会政策におおいに期待していた。それこそが、この運動がぼくたちに提示してくれるもののうちで唯一活力があると思えたものだ。この運動は、実際、そのラディカルでアナキスト的な、あるいは組合主義的な初発においては、しばし豊饒だったのだ。戦前、人々はセルクル・プルドンやリヨン学派で、国家主導下に労働組合と資本主義を混合させようと思いついていたが、やがてこれはファシズム [ムッソリーニのそれ] 下で独自に実現された。だが、戦後、ぼくはすぐに、この唯一建設的で、唯一時代の方向に即した要素が衰えてゆくのに気づいた。それはヴァロワの偏狭で空想的な同業組合主義（コルポラティズム）になって干からびてしまった。」⁽⁶⁾

ここには思想史家シュテルネルがフランス・ファシズムの温床と見なしたセルクル・プルドンから極右アクション・フランセーズを経て、ムッソリーニ流の権威的國家の主導する階級強調的ファシズムに至る道が、イタリア・ファシズムのフランス版ともいべきジョルジュ・ヴァロワのフェーソー運動にも言及しながら要領よくまとめられている⁽⁷⁾。なおシュテルネルのファシズム史は、社会闘争や党内抗争の一次資料よりもドリユやベルギー労働党の理論家アンリ・ド・マンの著作を重視して借用したために、ミルザら歴史家から批判されている⁽⁸⁾。とりあえず指摘しておきたいのは、後世がフランス・ファシズムの思想的源泉と考えるものの構図を他に先駆けて描きながら、ドリユがファシズム以外の選択肢を示したことである。序文にはこうある。

「ほくの時間稼ぎ戦術は、左翼の資本家たちが、大火に際して持ち家の一部を犠牲にして、彼らの高学歴・技術エリートとしての権力と、労農階級およびプチ・ブルジョワの行使する社会主義的統制とを調和させられるだけの知性と活力とを備えているだろう、という考えに依拠している。」⁽⁹⁾

ドリユは『デルニエ・ジュール』に発表した論文で、急進社会党の姑息な選挙政策を批判し、著書がバチカンから禁書になったモーラスを「慰藉」とするとともに、国会傍聴記である「あなたたちは祖国を怪物にしている」⁽¹⁰⁾では議会両翼をあげての愛国主義を警戒している。ドリユはリベラルで国際協調派保守として名のりあげ、『ジュネーヴかモスクワか』序文で思想系譜を明らかにした。すでにドリユは『新フランス評論』に掲載した「シュルレアリストの真の誤り」で、みずからを「いわゆるアクション・フランセーズに感化され、カイヨー氏のそのような現代保守主義の柔軟で優雅な可能性に秋波を送る、民族的共和主義者 (républicain national) を自称する者」⁽¹¹⁾としていたが、それはレーニン主義者になりつつあるかつての友への嫌みばかりではなかった。したがって、『ジュネーヴかモスクワか』は、アメリカ合衆国に対抗して国際連盟か共産主義によるヨーロッパ合州国を構想するという内容とは裏腹に、あくまで作家の里程標として読まれうる。ドリユは友人たちと決別し、また政治的旗幟を明らかにするために、知的来歴を明かすことを選んだのである。

さらに6年を経て、ドリユはファシズムを公に支持した1934年に、政治評論集『ファシスト社会主義』の跋文「道程」で政治的来歴を素描している。「わたしはカトリックで共和主義者でナショナリストのプチ・ブルジョワ家庭に生をうけた。」⁽¹²⁾に始まる知的自伝が、17頁にわたって素描される。このテキストは、8年後の評論集『もう待てない』(1942年)に一部再録され

後期ドリユ・ラ・ロジェ像の確定に向けて

ている。第二次世界大戦中にフランスに誕生したペタン内閣は、ドイツと単独休戦し、国民革命と称される反動的政治と対独協力をを行った。ドリユはドイツ大使オットー・アベツとの親交を梃子に『新フランス評論』を占領軍の文化政策寄りに編集するとともに、評論集を公にすることでれっきとしたバリの協力派としてフランス国民に呼びかけたのである。この本はナチ宣伝梯隊が1942年12月31日に作成した「推奨文芸書」に「フランスの新しい立場」の「政治」の項目で挙げられている。⁽¹³⁾

同じく1942年に、戦時下の検閲で白抜きの多かった『ジル』1939年初版が、伏せ字を起こし占領下の事前検閲を経て再版されると、ドリユは全作品を解題する趣の序文を付した。その内容を要約すれば、批評家たちの誤りは自分のエッセイと小説を別々に論じてきたことにあり、そのため、フランス社会に根深いデカダンスをたえず告発してきたことが見落とされてしまった。となる。フランス社会のデカダンスを云々するのは、当時のペタン派文化人の紋切り型だったが、ドリユは時流に応じたというより、自分の全作品が現在の時流に先行していたと強調した。

1943年の『政治評論集』序文も同様である。ドリユはこれから編む自選評論集3巻の内容を概説しており、この『政治評論集』は暫定的な書物だった。一貫性は3項目にまとめられる。

「(1) 1917年の第一詩集から、わたしはフランスへの愛とヨーロッパへの愛を結びあわせようとしてきた。

(2) わたしは死にゆく資本主義にも、生まれつつある社会主義にも、価値と必要性を見いだした。

(3) わたしは、貴族的価値、権威的価値の再生を、過去のいっさいの光輝の外に、しかも将来のたしかな再生を期して[それらの価値が]身にまという

るあらゆる仮装の陰に探求してきた。」⁽¹⁴⁾

最後に、当時のガリマール社は、アスリーヌがガストン・ガリマール伝に書いたように、ドリユが『新フランス評論』編集長を勤めることでナチ占領当局から保全されていたが、そこにも折りにふれて自伝的テキストが発表されている。さらに、対独協力時代のドリユは、しきりに自作解題に手を染めた。

これらの序文や跋文、自伝的エッセイの数々は、ともに一人称で語られ、新作の読みをそのつど仮構された「道程」に方向づける。ひとまずそれを里程碑テキストと名付けておこう。これらのテキスト群によって、作家ドリユは「書く現在」をある種の遠近法に位置づけている。

さて、ドリユが自分とは何かをつねに問う作家だったといっても、その頻繁な問いかけは読者を、そして書きつつある自分自身を、最終的にはある答えに導く。里程碑テキスト群を読み終わった時点で、読者が作者の一貫した自己イメージにおのずと気付くよう、テキストに配慮がされている。その典型的な例を遺稿に見よう。

作家の自殺後、遺族が少数を自費出版し、後に『新フランス評論』が再録した「秘話」は、1944年8月の自殺未遂の顛末を綴った手記である⁽¹⁵⁾。だが、同時にこの物語は、部屋で死に真似をしたり果物ナイフを胸にあてて遊んだ幼時の記憶にはじまる、症例的な自殺願望者の個人史である。最終行の、「今日、わたしはどこまで来ているのか」という問いに、数ヶ月後の睡眠薬自殺が応答した。フランス語に異常誇張症を表す *mythomane* という医学用語があるが、ドリユの場合、生きられた生を整合的に見せるためにたえず「道程」を語る顕著な傾向があり、しかもこの「道程」が作家の生を拘束した。新しく作家形成の物語を語るたびに語る主体は自己を更新し、創作の

後期ドリユ・ラ・ロシエル像の確定に向けて

新段階、つまり「後期」を始める。この仕組みが作家形成の神話である。

2 アイデンティティ（自己同一性）神話の必要性

前述のように、ドリユは読者、なかんずく批評家に対して、目的論にもとづいて論を立てるよう希望し続けてきた。ヒトラー・ドイツの崩壊を間近に、自死を決意した作家のペンになるテキストならそれも理解できよう。だが、ドリユは数年おきに里程標テキストを生産し、自画像を修正してきた。これは自己に固執し、ナルシズムに裏打ちされた自画像を書きなぐるといった程度を越えている。変化を自他ともに認めさせたいのなら、開き直ればよかったはずである。なぜ、ドリユは現在の自分を回顧的展望に収めることにこれほど拘ったのだろうか。それは、彼が文壇デビュー当初から、時代の証言者を自任していたからに他ならない。

里程標テキスト群はしばしば作家が歴史の転回点に居合わせた時に書かれている。そして、ドリユは「道程」を描くテキストの傍らに、独特な証言者としての姿勢を明らかにするテキストを置いている。

以下に引く『フランスの測定』の一節は、「兵士の帰還」という『新フランス評論』1920年8月号掲載エッセイが初出である。ドリユは同じガリマール社から詩集『審問』を出版した新進作家として語った。その内容を、複雑な文脈に照らして重層的に読み解かねばならない。

「ぼくは27才だ。ぼくは自分のペンにぶらさがっている。ぼくの明晰で堅い信仰は、白熱した鉄だ。目の前に、人影が見える。その繊細な姿形(lignes)の外に、生が流れ出すのをぼくは恐れる。

ぼくは生の持続を望む者に熱狂的に与している。ぼくの底意よ、お前がわかりかけてきた。お前を生まれたてのぼくの子供のように高く掲げよう。

次第にぼくにははっきりと本質的鼓動のありかが見えてきた。それはぼくの友人たちの心臓にしか、祖国の心臓にしか聞き取れない。

ぼくはできるものなら証言したかった、ぼくの友人たちのために、若者たちのために、闘った者、死んでしまった者のために。(煉瓦の山の背後で撃ちながら死んでゆく君が目に見えぬ。ユダヤ人の若者よ、なんて君はぼくたちの祖国のために血を流してくれたことだろう。) 空を飛ぶ者、ラグビーの緒戦の勝者、女神に導かれた拳で勝った男のために。」⁽¹⁶⁾

このテキストの発表当時、ドリユは同様に戦場を情熱的に語ったモンテルランと並び称され、復員作家の若手世代として注目されつつあった。塹壕戦の悲惨を描いた多くの作家たちとは異なり、また祖国愛を語るにしても、ドリユは「本質的鼓動のありか」だけを注視する。モンテルラン・テ・ドリユと括られた二人は、後にバンジャマン・クレミューから、戦争においてロマン主義的な生の躍動を称えるのみでその残虐性を批判していない、と論難される⁽¹⁷⁾。だが、ドリユはあらかじめこの引用箇所、個々の人生でなく「生」に関心があると訴えていたのだった。ドリユにとって「生」とは「繊細な姿形」のうちに匿われているはずであり、表現者としてそれを引き出す以外に「生」の流出と減退を食い止めるすべはない。

前述のバレス評にまつわるテキストの言葉を使えば、ドリユは「官能的想像力」(imagination sensuelle)でそのありかを掴んだ「生」を、「意志的技芸」で形象化すべく自由詩を選んだ⁽¹⁸⁾。第二次世界大戦中の回想録断片(「文学的デビュー」⁽¹⁹⁾)に、1915年にダーダネルス海峡の第二戦線から赤痢になって下げられた時に、若い看護婦からクロードの詩集を借りて形式に開眼したとある。これ以外の直接資料として、婚約者コレット宛の書簡の他に、パリの「衛生兵」レイモン・ルフェーブルにシャルルロワの突撃と負傷

後期ドリユ・ラ・ロシェル像の確定に向けて

を語った書簡が残っている⁽²⁰⁾。また、ドリユは1920年にダグイストラの『リテラチュール』に「最初の批評あるいは気づかない己の欠点」を発表した。このテキストによれば、負傷してドーヴィルのホテルを接收した病院に居た1914年、ドリユが従業員の一に「シャルルロワの戦い」と題された原稿を見せたところ、「彼はプレシオザウルスの狩人の勘でもって、ただちにぼくに、ポール・アダンの影響があるね、と言った」そうである。このように、ドリユは最初は古風な物語だった戦争体験を、次第に観念的な詩語に煮詰め、戦争とスポーツの共通点を見いだした。

そのために彼は『審問』と『フランスの測定』で戦争を、ラグビーを、ボクシングを語り、「身体の復興」と題された詩でラグビーを謳った⁽²¹⁾。戦没者も選手も「生」を封じ込めて爆発させる器（「姿形」）にすぎない。「できるものなら証言したかった」とは、ドリユのテキストが個々の人間の風貌ではなく、「生」の形式をなぞったので、具体的な人物——たとえば、シャルルロワで戦死した、政治学院以来の友人でユダヤ系フランス人のアンドレ・ジェラメック——のために証言できなかった事情を表している。ドリユは自分で自分に書く権利を賦与しているが、その対価は困難な証言というものだった。

ところで、ユダヤ系フランス人の血の貢献に対する感謝は、ドリユが敬愛するアカデミー・フランセーズ会員作家モーリス・バレスの『フランスのさまざまな霊的家族たち』（1917）にもあった。厭戦気分が漂い、陸軍で反乱の起きた1917年に、名高い反ドレフュス派で反ユダヤ主義者のバレスは、あえてユダヤ系フランス人を祖国の懐に招き入れたのである。この年に詩集『審問』をドリユから献じられたバレスは、感銘を受けたと公に誉めてくれた。ドリユはまた、ユダヤ系作家アンドレ・シユアレスにも詩集を献じ、あ

わせて前線復帰を願い出たことを告げている⁽²²⁾。ドリユのテキストが書き込まれている文脈は、フランスのユダヤ教徒における民族的共属感情と祖国愛の葛藤という、非ユダヤ教徒側が18世紀以来しばしば持ち出してきた「二重の忠誠」のテーマの変奏である。なぜなら、ドリユは、フランスのユダヤ人がドイツの同胞と戦うまいとして、あるいは戦争そのものを自分とは関係のないものと見なして、兵役逃れをしたのではないか、という言外の問いに答えながら書いたからである。実際には、第一次世界大戦を機に、フランスのユダヤ系社会を挙げて受け入れ社会に対する愛国心を誇示した。そして、その多くは宗教心をほとんど失って両親や親戚への配慮からシナゴグに通っていたにすぎないユダヤ系フランス人ひとりひとりの死が、まさに「ユダヤ人」の貢献として記録された⁽²³⁾。

引用箇所は、これからさまざまな方向に発展しうる要素を重ね合わせたまま、読者に投げ出した。ドリユは今後もこのような書き方をするだろう。ところが、里程標テキスト群では、これらの「本質的鼓動」をそのつど確認して名指し、愛読書や結社、思想的立場をトピックにして時間軸上に「道程」を描くことで、みずからの「底意」をある時点で可能なかぎり説得的に描き出している。言い換えれば、ドリユは決断におけるクロノロジカルな順序を描く叙述と、出逢った師や友人、書物を再評価する思弁的な叙述を結合させ、先に引いた「兵士の帰還」とは逆に、そのつど選択の可能性を摘み取りながら思考を歴史の推移にあわせて前進させた。こうして、里程標テキストはいきおい単線的になり、『ジュネーヴかモスクワ』序文よりも『ファシスト社会主義』跋文が、さらに『政治評論集』序文が、というふうなファシズムとナチス支配下のヨーロッパ統合という主張を、次第に唯一無二の選択肢として読者に提示していった⁽²⁴⁾。

後期ドリユ・ラ・ロシエル像の確定に向けて

戦場で「生」を手づかみしたかのドリユが、「友人たちの心臓」、「祖国の心臓」とみずからの心臓の共鳴を語ったのは 1920 年のことである。だが、このテキストに含意される、ユダヤ人への曖昧な視線の根拠が、もし対独協力からさかのぼって了解されれば、読者はそこにドリユ文学のファシズム的な傾向を認めることになるだろう。読者とは、この場合、第二次世界大戦中に初期著作を読み直す 20 年後の作者自身でもある。

『フランスの測定』の引用箇所には、もうひとつ誤解を招く点がある。27 才のテキストに明瞭に表されているように、ドリユにとって書く営みは『世紀児の告白』のごときロマン主義文学に直結していた。たしかに、ナルシズム以外の何者でもない自分語りに、しばしば作家は導かれている。その典型は 1925 年以來、いくつもの小説に登場するジル (Gille, Gilles) と名のる主人公であろう。彼らは一様に、汲みつくされない欲望に身を焦がしながら、しばしば性的不能によって欲望充足の不可能性を証明する。だが、「兵士の帰還」に見たような、証言を激しく求めながらも「生」を観念的に捉えるがゆえに表現を断念しなくてはならないという二律背反が、独特の告白体には作家を導いていたのも事実であって、『女達に覆われた男』の主人公ジルは、かつてなら性愛も戦争のようだった、と復員世代の友人に不用意に語った⁽²⁵⁾。この自画像からは、戦後の社会において公に語るのを控えねばならない事柄こそが、社交家で獵色家の世評を取ったドリユ・ラ・ロシエルを困難な表現に向かわせた事情がよくわかる⁽²⁶⁾。

数年置きに里程標テキストを書いて知的遍歴を辿り直したドリユは、たえず自意識をヨーロッパの歴史的転回と重ねあわせようとしてきたために、個人の気分を時代の風潮と混同しがちなロマン主義の一側面を、一世紀遅れて体现した恰好になっている。内向と時代精神への同化という相反するロマン

主義の側面は、一般に自意識過剰ないし誇大妄想として一蹴されがちだが、1930年代からのドリユにあって、それは歴史および文学への態度の深化を証している。

すでに拙論に引いたテキストだが⁽²⁷⁾、ドリユは『若いヨーロッパ人』(1927)を『初期著作集 1917-1927』(1941)にまとめるさいに、重要なテキストの書き直しをした。並べて引用しよう。

「わたしの自我は、もはや社会の中の一個人ではなく、人間の刻印を決定的に帯びた一個の世界なのだ」

「わたしの自我は、もはや社会の中の一個人ではなく、壊滅する世界なのだ」

ふたつの版で、自我と世界が符合するとしても、世界の様相は一変していた。この書き換えは、以下のような歴史的文脈とドリユの政治的選択の相関として読めよう。

3 歴史との遭遇

まず、初版の一節は、「血とインク」という創作論の楽観的なまとめに位置する。一人称の語り手「わたし」は、小説『女達に覆われた男』の失敗の理由を検討した後に、戦争体験とともに狭隘な個人主義からも解放されてこそ、作家としての道が開けると論じた。当時のドリユは、前述のように、平穏を取り戻した第一次世界大戦後のフランス社会に言葉の礫を投げる若者たち(グダイスト)から距離を取り、ブリアン主導のヨーロッパ秩序再編に協力する覚悟でいた。彼は左翼第一党だった急進社会党を叱咤するとともに、反ナショナリストの立場で国会傍聴記を書き、やがて国際連盟の討議を聞き

後期ドリユ・ラ・ロシュ像の確定に向けて

にジュネーヴに赴くだろう。したがって、1927年のテキストに読まれる自我と世界との重合は、人間たちの営為が世界を変えうる、という信頼にもとづいていた。

一方、ドリユは小説家としても、「完全な人間」という理想を掲げて、これを世界の刷新のために働くジャーナリスト（1928年刊の『ブレーシュ』）や革命家（1929年の『窓辺の女』）に見いだすだろう。後者はギリシャ取材にもとづいているが、ダニエル・アレヴィ家でマルローに引き合わされて対抗意識を燃やしたのかもしれない。ただし、作家の感情移入を助け、また小説を意外な結末に牽引できるよう、前者の主人公は『アクション・フランセーズ』とおぼしい『カトリック』で健筆を揮うというより、宝飾品をめぐる金銭トラブルと女性秘書との浮気に翻弄されている。後者でもタイトルが示すように、警察に追われて女性の部屋に匿われたアナキストよりも、「窓辺」で夜闇を眺めて人影を見つけた「女」の方が、むしろ主人公である。「人間の刻印を決定的に帯びた一個の世界」は、ドリユの小説においてとりわけ、人間らしい卑小さ、軽薄さを伴っていた。ギリシャが共和制に移行し、クーデタを控えた「1924年5月」と巻頭に明示されていても、『窓辺の女』のヨーロッパ人たちは「いつものように退屈していた。」⁽²⁰⁾

ところが、1930年代のフランスは、ひとつ間違えば1920年代のギリシャのように社会の求心力が失われる危機にあり、ドリユはその歴史状況をつぶさに観察できる立場にいた。彼は急進社会党改革派のリーダー、ガストン・ベルジュリと1929年に知り合い、政治評論『すべての祖国に抗してヨーロッパを』（1931）を献じる仲にまでなった。この本の中で、ドリユは独仏の係争地アルザスの国際管理を展望している⁽²¹⁾。また、彼はブエノスアイレスで『シュール』誌を創刊したヴィクトリア・オカンボの勧めで、南米に講演旅

行に出かけた。帰国後、ドイツでも講演している。はからずもドリユは、ファシズムと共産主義の運命を占うヨーロッパ知識人の代表としての名声を、かりそめながら得たのである⁽³⁰⁾。

なるほど、ガリマール社の作家だったとはいえ、ドリユはジッド、マルロー、グレットウイゼンらポンティニーに集う文化人ではなかった。そして、早くから右翼作家を自任していた彼が、左翼の若者たちに本格的に語りかけるようになったのは、1934年2月6日のファシスト暴動（しかし、国会調査委員会は極右団体の関与を否定した⁽³¹⁾）以後に、ベルトラン・ド・ジュヴネルの『若者たちの闘い』誌に寄稿し、後にベルジュリの共同戦線に至る革新運動（ここに左派カトリック系『エスプリ』誌のジョルジュ・イザールも合流した⁽³²⁾）に加わってからのことだろう。だが、旧出征軍人ドリユにとっては、精神の危機や世界恐慌よりも、ブリアンが1929年にヨーロッパ連邦を提唱し、翌年にライン駐留フランス・ベルギー軍が撤兵して独仏協調路線が敷けたことの方が重要だった。「フランスは死にかけている。だが、形式だけが死ぬのだ。生にとって、死とはすでに再生のことだ。生は永遠なのだから。フランスで生は甚大な変身を遂げつつある。」⁽³³⁾「ドイツ人に与える演説」という、『すべての祖国に抗してヨーロッパを』巻頭のテキストで、ドリユはこう宣言した。世界を自分たちで刷新し、人生を変えるという意味で、ドリユが「人間の刻印を決定的に帯びた一個の世界」に自己同一できた時期もあったのである。歴史との幸運な遭遇もあったことが、1927年版の「血とインク」から知られる。

ドリユの全作品を、戦場で味わった暴力への畏怖に始まり、ファシズム礼賛と対独協力に至る直線的な展開と見る批評は、バルヴェにせよベルザにせよ、1930年前後の多様な可能性をほとんど無視している。ルブッサンも、

後期ドリユ・ラ・ロシュ像の確定に向けて
ジュネーヴ派時代のドリユを、「ベルリン、新しいジュネーヴ」に幻惑されるまでのステップと見なす⁽³⁴⁾。おそらく、それは対独協力時代のドリユが、国際連盟をユダヤ人とフリーメーソンの伏魔殿のごとくに描いたためだろう。さらに、協力時代の里程碑テキストは、ゲルマン的（人種主義的）ヨーロッパ、ファシスト・ヨーロッパを強調して、事実としてあった選択の可能性を切りつめてしまった。サルトルは「協力者とは何か」⁽³⁵⁾でドリユについて特筆し、自己嫌悪が高じて人類嫌悪に達したのをナチズムへの心酔の理由とする。それはあたかも『若いヨーロッパ人』の書き換えを念頭にしたかの評である。

まさに、1930年代以降のドリユ・ラ・ロシュがヨーロッパのファシズムの消長にみずからの作家活動を重ね合わせたがゆえに、全作品を展開運動になぞらえる解釈はそれなりの意味を持つ。ドリユ自身が、そのつど自分の位置を確かめねば書き進められなかったとすれば、自我と「壊滅する世界」とは、どのような歴史的文脈において重合したのだろうか。

4 歴史の偶然への抵抗

書き換えの時期をうかがい知るには、「奇妙な戦争」中の『日記』を読むに如くはない⁽³⁶⁾。1940年2月13日に、ドリユはこう記した。「わたしは初期著作を書き直している（『審問』『行李の底』『若いヨーロッパ人』『首尾一貫』だ）。10日程前の2月2日にも、「わたしは初期著作集の仕上げをしている」とあるが、そこに列挙された作品に『若いヨーロッパ人』はない。おそらく、ドリユは、『ジル』の見本が前年12月5日に届いてから、自著を読み直し始めたのだろう。1940年3月28日付で、『審問』『行李の底』『首尾

一貫『若いヨーロッパ人』を収める『初期著作集』改訂版がほぼ完成」とある。このあとすぐ、『今世紀を理解するための覚え書き』を書くのだから、問題の書き換えは1940年2月から3月にかけてなされたと思われる。「壊滅する世界」は、同年5月上旬の独軍猛攻と英仏軍の雪崩的敗走を知って後の加筆修正ではなく、むしろドリユは御破算への期待と不安の相半ばする予感を、新しい「若いヨーロッパ人」の心境としたのである。

同時期の日記には、「フィンランドが軋んだ」(1940年2月17日)、「ドイツ軍は攻撃するだろう。気配を感じるのだ」(3月9日)、「グラディエ失墜。フランスでは「独裁者」はありきたりの首相ほども長持ちしない」(3月20日)、「ムツソリーニは海軍登録者の十期分を動員する」(4月3日)とある。

それでは予測しえなかった1940年のフランス敗北にさいして、ドリユは自分の位置を再確認できたのだろうか。『日記』は1940年7月13日から1941年9月18日まで中断している。この時期になされた対独協力への直接関与は、没後に刊行された『回想録断片 1940-1941』と、さまざまな新聞・雑誌に寄せられたテキストの読解を通じて改めて論じねばならない。軍事的敗北を目のあたりにした気分なら、ベタン政権成立まで綴られた『日記』と、著者が「1940年1月～7月」と執筆時期を特定した『今世紀を理解するための覚え書き』とが多くを語ってくれる。後者の一節を引こう。

「フランスは、天賦の才を切り詰めてまでして合理主義に従属させたが、その合理主義のせいで破壊された。今日、その合理主義が敗北したのだ。」⁽³⁷⁾

さらに、占領初期のもっとも重要なテキストで、その後の『新フランス評論』編集や、対独協力メディアへの寄稿、テクノクラートとの接触にまでいたるドリユの一連の対独協力を見通す長文評論が、1940年9月に執筆された。それは1943年に『政治評論集 1934-1942』に収められるまで未発表だっ

後期ドリユ・ラ・ロシエル像の確定に向けて

た「新しいフランスの測定」である⁽³⁸⁾。同書の第4部冒頭にこのテキストを配したドリユは、新しいヨーロッパの構図における人口8500万の統一ドイツの覇権と人口4000万（そのうち「3~400万が外国人」）のフランスの地位低下とを敗戦の原因に挙げた。これはペタン派が好んだ装備と人員と同盟国の不足という口実と大同小異といえる。そして、ドリユは旧著『フランスの測定』をふりかえって、「フランス国民は、子供をつくるか、それとも大国として振る舞う政策を捨てて、ヨーロッパ融合に邁進するか、をきっぱりと選ぶべきだったのだ」と述べ、「したがって、たとえここに踏み込むのは無謀と思えるにせよ、今日の事態に照らせば不可避となった歴史の回顧を、あえて試みようではないか」と読者を促した⁽³⁹⁾。こうしてドリユの描いたシャルルマーニュ（カール大帝）からナポレオンを経てヒトラーの国家社会主義にいたるヨーロッパ統合の道程は、たんに彼自身を協力に走らせただけでなく、やがて陰惨な結果をもたらすだろう。というのはシャルルマーニュは、第二次世界大戦末期、占領国のフランスで反共義勇軍に志願した若者たちが東部戦線に投入されたさいの部隊名だからである。その指揮官ジャック・ドリオは従軍中に事故死した。もちろんドリユが部隊を命名した証拠はなく、大戦末期の彼はむしろスターリンの勝利を確信し、希望さえしていたが⁽⁴⁰⁾、1942年末にドリオのフランス人民党に復党したのも事実である。

さて、この政治評論集の序文が書かれたとされる1943年1月、スターリングラードでのドイツ軍敗北がすでに明白になっていた。前年末の日記（12月26日）でドリユは、「ヒトラーはナポレオンと同じ失敗をした。2年前には信じられない陳腐なシナリオだ」とロシア遠征で冬将軍に敗れたナポレオン軍を思い出している。予測しえなかったこの事態に、ドリユはもう一度、新たな里程標テキストを書いて反応したのだろうか。『政治評論 1934-1942』

を来るべき3巻本のためのつなぎとする序文の趣旨に、その気配がうかがえる。だが、結論からいえば、6年来のファシスト作家として、ドリュは敗戦国フランス（そう彼は理解していた）の歴史的文脈への参照をしかねている。なぜなら、彼によれば、自分は1934年のファシスト宣言以来、つねに正しかったのであり、その正しさが今になって立証されたと納得していたからである。評論集『もう待てない』に『ファシスト社会主義』跋文の「道程」を一部再録して見立ての正しさを誇ったドリュは、以後、ドイツの敗北が濃くなっても、1934年の決意に忠実であろうとする。そして、現実のファシズム体制への不信と幻滅を、ヒトラーみずからが1934年6月のレーム暗殺によってファシズム精神を裏切ったことに帰してゆくだろう。『日記』には1943年以降、つまりスターリングラードの独軍投降後、4カ所でこの「長剣の夜」が言及される。1943年7月21日の記述を例に挙げよう。

「ヒトラーは6月30日に呪われて滅ぶ。この日、パーペンや將軍たちの代わりにシュトラッサー、レームら左翼を切り捨てたのだ。」

過去の慧眼に固着するドリュは、自殺未遂後の「秘話」で、次のような述懐に導かれるだろう。

「1939年から1940年にかけての素晴らしい平安を、どうして1940年から1941年にかけての馬鹿げた喧噪と交換してしまったか。この誤りは、たしかに償わなければならなかったのだ。」

だが、まさに償いたくなかったのである。わたしは1940年に抱えこんだ負債を1944年に支払うのが嫌だった。」⁽⁴¹⁾

自我を「壊滅する世界」と重合させられた1939年から翌年にかけてが「平安」であり、対独協力をリードしようと『新フランス評論』を編集し、プシュー（後にダルラン内閣の内務大臣）やウォルムス銀行グループと接触

後期ドリュ・ラ・ロシエル像の確定に向けて

した 1940 年から翌年にかけては「馬鹿げた喧噪」と見なされている。予言者のように先駆的なファシストであったがゆえに得た「平安」を、挫折した対独協力および国民革命に与したことで失った罪は大きい。それゆえドリュは対独協力強固派（ウルトラ）を貫き、しかし法と歴史の裁きを拒んで自死を選んだのである。

5 超越論的語りへの移行～後期ドリュ・ラ・ロシエルの始まり

災いだ。わたしは滅ぼされる。わたしは汚れた唇の者
汚れた唇の民の中に住む者
しかも、わたしの目は
王なる万軍の主を仰ぎ見た
(旧約聖書イザヤ書、6の5の一節。
ドリュ・ラ・ロシエル「冬と春のあいだ」に引用)

ドリュがファシスト宣言の先見性を自覚したのが「奇妙な戦争」中であり、対独協力の失敗を償うまいとしたのが 1944 年だとすると、一体いつの時点で誤りを悟り、それ以後をいかに生き、何を書こうと決意したのだろうか。真の意味で「後期」と言いうるドリュ・ラ・ロシエル像が確定するのは、連合軍の北アフリカ上陸に先立つ 1942 年 4 月に『新フランス評論』に発表された「冬と春のあいだ」によってである⁽⁴²⁾。

このエッセイは、旧約イザヤ書の引用と、本論が里程標テキストと呼ぶ回顧的語りとを交錯させながら、次の冒頭の一節に要約される主張を述べた。

「わたしは力を愛していた。そして、自国民を信頼しながらその力に安住

できるように、わが国民にも力よ漲ってくれ、と願ってきた。』

国威を通して個人の力が確認される防衛的ナショナリズムのありようは、ドリユの初期作品『フランスの測定』に容易に読みとれる。ラグビーの国際試合でフランス勢が敗北したことが、第一次世界大戦でのあまりさえない勝利に引き比べられていたからである。「ぼくたちだけが勝利の女神と寝たわけじゃない」⁽⁴³⁾と、平和の再来が言祝がれた 1922 年のフランスに、27 才のドリユは嫌みを投げつけた。

「冬と春のあいだ」では、こう回想される。

「四度の戦役から戻ったわたしは、フランスのことを思ってぞっとした。勝利が信じられなかった。あまりに多くのアメリカ人。あまりに多くの黒人。わたしは『フランスの測定』を書いた。わたしたちが子供を作らなくなって以来、手の施しようがなくなっていた。この考えは単純で、うち消しようがなかった。」

力への愛が「生」への志向性を保証してくれるからには、みずからの力が減退すれば、力のありかを見失う。1934 年にファシズムに共鳴した経緯を、醒めた目でドリユは、「生まれたばかりのこの希望に、わたしは突進した。ちょっとシャルルロワの突撃のようだったが、くたびれきってはいた。数ヶ月を経て、フランスがファシズム国家になれないことが明瞭になった」と説明している。ドリユが予言者イザヤを援用した理由はそこにある。

「イザヤ、この血筋でも精神においても貴族たる彼は、ちっぽけな祖国の国境の向こうを見ていた。」

貴族主義は、貴族でないのにそれらしくダンディを装い、また知識人たることで貴族を演じてきたドリユの強迫観念といってよい。エッセイの筆者は、誤解の余地のない書きっぷりでこう記した。

後期ドリユ・ラ・ロシエル像の確定に向けて

「最後にヨーロッパに戻るなら、フランスの現況は、イタリア、スペイン、ハンガリーなど老いた諸国民が、フランスに勝るとも劣らない何世紀にもわたる矜持を抱きつつ、みずからの精神文化と、政治・社会にかかわる文明、そして自国経済を基盤から守るために、より若いルーマニア、ブルガリア、フィンランド、スロヴァキアなどの国民とともに、ドイツと交らざるをえない現状と突きあわせる必要がないだろうか。

したがって、わたしは力への愛を、自国、あるいは一国家の枠内では、もはや実際的にも理論的にも発露できなくなって、これをヨーロッパに移している」。⁽⁴⁴⁾

まさにこのエッセイが発表された1942年4月、対独協力政治家でヴィシー政権初期にはベタン元帥の後継者に指名されていたピエール・ラヴァルが政権に復帰した。ラヴァルの、「わたしはドイツの勝利を希望する」という悪名高い言葉と、アメリカ参戦後にドリユがあえてしたドイツへの支持表明とを、おそらく当時の読者なら同じ文脈で読んだろう。

だが、力の漲る世界にフランスなど「老いた諸国民」は取り残されている、と彼には感じられた。すでに「奇妙な戦争」時代に、彼は中立国や小規模な国民国家は時代遅れだと日記に綴っている。まだヒトラー・ドイツが西部方面で電撃戦を始めていない1940年4月10日付けの日記に、「おお 戦士たちの生氣／かかとは拍子をとり／砲はとどろく／北の神がみが降りてくる」と、破局を希望するような詩を書き込んでいる。対独協力の真の理由は、つねに生の持つ強度を現出させようと欲する強者への愛であり、ヨーロッパ政治の折々の相対的な勝者への愛ではない。「冬と春のあいだ」の筆者によれば、「ドイツは道具でしかない。国民としてのドイツ人を越え、全地球を苛んでいる——わたしたちには戦争の第二局面でそれがより明瞭に見えてき

た——ある革命の道具のひとつにすぎない」⁽⁴⁵⁾。したがって、このエッセイが、デカダンスという「冬のまっただなかに闖入した春」を称えるとき、春とはファシズムに他ならない。ただし、ドリユによれば、ファシズムは「脆弱さのふところに不幸が生まれる」ことである。占領下のフランス人のように弱さに馴染んだ者たちには、力の到来は災厄を意味した。

エッセイに先行する 1942 年 1 月 3 日付けの『日記』には、次の一節がある。

「預言書を読み、彼らが協力主義者 collaborationnistes だとわかった。あの形式においては万事が失われていると彼らは知っていた。ユダ王国はアッシリアには勝てない、とイザヤにはわかっていた。その苦い思いが彼の抒情の源だった。イザヤに他の歌はなく、敗北を歌ったのだ。」

この時のイザヤ像を、ドリユはエッセイでみずから重ねた。

「ああ、これらの予言者たち、つまり内向して脆弱化した国民の中で、力を感じることでできる男たちは、嘆き、罵り、自分たちの祖国の敗北をもって文学をなす祭祀と詩人でしかない。なぜなら、彼らはその声が聞きとけられないと知っていたからだ。」⁽⁴⁶⁾

こうして、ドリユは語る主体を、人間の歴史を超越したところ、つまり完全には了解しえないある超越的審級に押し上げた。ヤハウエが予言者に命じて民衆に言わせた言葉は、「聞け、聞け、理解するな。見よ、そして了解するな」である。イザヤ書のこの一節は、エッセイで二度繰り返されている。「冬と春のあいだ」を発表した直後、ドリユは「アルゼンチンでボルヘスから聞いた、[18] 70 年頃のボリヴィアのある独裁者の挿話をヒントにした奇想天外な小説『馬上の男』を、『日記』を中断して (5 月 20 日) 執筆した。あまり論じられてこなかった作品だが、ここには超越論的語りのうちに、ドリ

後期ドリユ・ラ・ロシエル像の確定に向けて

ユの宗教への関心が読みとれる⁴⁷⁾。

ドリオのフランス人民党に復党（11月初旬）したドリユは、その翌日の『日記』に、「わたしは破滅だ。ドイツも破滅」（1942年11月8日）と書きつけざるをえない。連合軍がアルジェリアとモロッコに上陸し、ドイツとの休戦協定では中立地帯だったモロッコが戦場になったからである。3日後、ドイツはヴィシー政権の自由地域を武力制圧し、対独協力政権は存在意義を失った。このように、ふたたび歴史の偶然に見舞われてしまったドリユだが、長くは動揺しなかった。彼は宗教劇『ユダ』を書く一方で、協力メディア『国民革命』に自殺未遂の直前まで寄稿するだろう。自殺の二日前、ドリユは『日記』にこう記している。

「おそらく『カバラ』はユダヤ人の『ウパニシアッド』だ。（中略）これからまた、『ディルク・ラスプ』の後半部に取りかかることになるだろう。一度始めたら、ともかく終わらせたいという執着のせいだ。」

1945年3月15日の自殺は、パリに戻って前妻コレット・ジェラメックの持ち家に身を潜めたドリユが、レジスタンス新聞に自分の逮捕を求める記事を読んで突発的に行ったと解釈されている。対独協力裁判法廷や私刑に巻きこまれまいと自死を選んだ作家の思惑とは別のところに、この作家が後世の読者をにらんで作り出した予言者像が存在する。後期ドリユ研究は、エルヴィエ、ランサールの先駆的研究を土台としながら、この超越論的審級に批評を向かわせねばならない。

引用したドリユ・ラ・ロシエルのテキストと略称

I: *Interrogation*, Gallimard, 1927

- EC : *Etat civil*, Gallimard, 1921, coll. « imaginaire »
- MF : *Mesure de la France*, Grasset, 1922, réédition en 1964
- HCF : *L'Homme couvert de femmes*, Gallimard, 1925, réédition en 1977
- JE : *Le Jeune Européen*, Gallimard, 1927
- GM : *Genève ou Moscou*, Gallimard, 1928, réédition en 1978 avec *le Jeune Européen* version de 1941
- FSF : *Une Femme à sa fenêtre*, Gallimard, 1929, réédition en 1976
- ECP : *L'Europe contre les Patries*, Gallimard, 1931
- CC : *La Comédie de Charleroi*, Gallimard, coll. « folio »
- SF : *Socialisme fasciste*, Gallimard, 1934
- G : *Gilles*, Gallimard, 1939 et 1942, réédition en « folio »
- EJ : *Ecrits de Jeunesse*, Gallimard, 1941
- NPCS : *Notes pour comprendre le siècle*, Gallimard, 1941
- CP : *Chronique politique 1934-1942*, Gallimard, 1943
- SE : *Sur les écrivains*, Gallimard, 1964
- DJ : *les Derniers Jours*, Jean-Michel Place, 1979
- J : *Journal 1939-1945*, Gallimard, 1992
- Cor. : *Correspondance avec André et Colette Jéramec*, Gallimard, 1993

[注]

- (1) “Verra-t-on un parti national et socialiste?” *la Lutte des jeunes*, 4 mars 1934, repris in *Textes retrouvés*, Editions du Rocher, 1992, pp. 117-127
 ジュヴネルの新聞に寄稿したテキストは、加筆を経て『ファシスト社会主義』第2章「フランスの状況」に収められた。SF, p.
- (2) EC, p. 136 拙論参照 « Qui a donc tué le petit Cogle ? » in *Etudes de Langue et Littérature Françaises*, N° 58, 1991
- (3) EC, pp. 109-110 imagination は p. 39, 55, 59, 98 などでも否定的に描かれる。romantisme は、本文に引用した身体軽視・知性偏重の傾向を意味し、「すではくはの悩みのタネだったこのロマンティスムにはくは挑戦する」p. 110 とある。とはいえ、『戸籍』は治癒の試みとしては失敗しており、「自分自身を小説の登場人物として扱ったところで、一人前の男 (un

後期ドリユ・ラ・ロシェル像の確定に向けて

homme accompli) ではまるでないことの慰めにはならない。」p.137 さらに、「このあと、はくの 18 才の避けられないロマンティズムの話をして何になるだろうか」とある。p. 141 この語り手はすでに 16 才で死んだことになっている。p. 138 語りの混乱については註 (2) 拙論を参照されたい。

- (4) ニーチェへの言及は p. 55, 108 など。ドリユは早くからニーチェを読んでいたが、その影響の研究は下記。Kunnas, Tarmo : "Drieu la Rochelle et Nietzsche" in *L'Herne*, 42, 1982, pp. 323-336
- (5) *Derniers Jours* はジャン＝ミシェル・プラス社からリプリント版が出ている。『ジュネーヴかモスクワか』はドゥザンチの序文を付して『若いヨーロッパ人』(新版)と合本で再刊された。
- (6) GM, p. 142
- (7) Sternhell, Zeev : *Ni droite ni gauche*, Seuil, 1983 ; 深澤民司『フランスにおけるファシズムの形成——ブーランジスムからフェーリーまで』岩波書店 1999 年
- (8) Milza, Pierre : *Fascism français, Passé et Présent*, Flammarion, 1987, pp. 28-41 イタリア・ファシズムの対フランス宣伝政策の専門家ミルザは、シュテルネルがファシズムの思想と運動の形成において果たした第一次世界大戦の役割を軽視し、大戦前にすべての要素が出揃ったと主張したのを非難している。
- (9) GM, p. 144
- (10) DJ, 5, pp. 1-6 ; 6, pp. 4-10 ドリユは戦争体験を再検討し、ランス爆撃で墓地が吹き飛んだことを回想して、「これから支社を厄介払いするんだ。これぞヨーロッパ人が彼らの死者に仕掛けられる最良の戦争だ」DJ, 6, p.9 と書いた。この部分は翌年、『ジュネーヴかモスクワか』に再録された。GM, p. 187
- (11) SE, p. 48 ジョゼフ・カイヨー (1863-1944) は大蔵大臣を何度も務めた政治家で、右翼にしながら左翼の政治を行ったとされる。第一次世界大戦前夜、蔵相として戦争反対の立場を取ったために『フィガロ』紙から攻撃され、夫人が編集長を殺害した。戦後、利敵行為の咎で有罪宣告されたこともある。
- (12) SF, p. 219
- (13) Loiseaux, Gérard : *La littérature de la défaite et de la collaboration*,

Publications de la Sorbonne, 1984, p. 523

- (14) CP, p. 9 この後、1943年6月号で再度休刊する『新フランス評論』掲載のテキストとあわせて、1943年5月8日から12月11日までの『国民革命』への寄稿論文、そしてドイツ語の宣伝雑誌に掲載された「フランス・イギリス・ドイツ」が『ヨーロッパのフランス人』にまとめられた。1944年7月1日、ドリユはシュザンヌ・テズナ夫人宛書簡で没後刊行にふれ、単行本未収録の『国民革命』掲載論文の出版を希望している。
- (15) 「チュイルリーの中央並木道でわたしは、わたしは一人の若い男と出会った。知らない男だったが、こちらを知っているのはよく分かった。そして、連れ的女性から察するに、「レジスタンス」の一員だった。」拙訳『日記 1939-1945』メタログ、1994年、583頁 「秘話」執筆時期は同書521頁参照。
- (16) MF, pp. 32-33
- (17) レマルク『西部戦線異状なし』の書評に「[モンテルラン著『夢想』の] アルバンと『審問』のドリユは、彼らの内に権力意志の高揚を感じている」と書いた。NRF, oct. 1929, pp. 569-570 ドリユは同誌11月号で反論した。SE, pp. 145-149
- (18) GM, pp. 32-33
- (19) SE, p. 38
- (20) Cor, pp. 209-215 ルフェーブルに酷評されたことは「文学的デビュー」にも見える。SE, p. 34
- (21) I, pp. 49-53
- (22) SE, pp. 87-88 「ぼくは前線でぼくの仲間たちが大好きになりました。そして、ぼくたちの苦痛を哀れんでもいます。しかし、ぼくは戦争を望んでいたのです。そして、それを今なお甘受しています。けれども、植物のような大学の奥や不衛生な兵舎で、絶望的に戦争を呼んでいたとき、こんな戦争だとは夢にも思わなかったのです」
- (23) 拙著『ふたつのナショナリズム～ユダヤ系フランス人の「近代」』みすず書房、2000年、終章参照。
- (24) 復員者からファシストへの変貌は、むしろ小説に書き込まれている。たとえば、「ぼくが戦争から持ち帰った考えのうち、その時さぐりあてたのはそれだけだった。ぼくたちはこんな手合いが多かった。だが、この考えはいつまでも残った。ぼくたちは負けっぱなしで、年寄りたちに諭さ

後期ドリユ・ラ・ロシエル像の確定に向けて

- れた。彼らは戦争と平和の間を善人づらして歩き続けた」 CC, p. 104 この 1934 年の中編小説のテキストは 1939 年の次のテキストに送付できよう。「君にはこれがぼくたちの世代にとって千載一遇のチャンスだってことがわかってない。ぼくたち帰還者は、戦争に胸をふくらませてはいなかったが、少なくとも強い生という感動的な観念に永遠に繋がれて戻ってきた。そのぼくたちにとってなにも起こらなかった。」 G, p. 602
- (25) [リュック]「ぼくもそんなことを時々考えたが ...しかし...それに君は戦争の話をする。いつもそうだ、君らときたら、苛立つなあ、おぞましいよ...それじゃ何かい、性愛とは殺し合うことか」 [ジル]「そうだ。めぐりあう女ごとに、かつては。」 [リュック]「かつて、だって? 本気で言っているのか?」 HCF, pp. 200-201
- (26) ダンディ、復員作家という紋切り型は、ドリユについての既成の作家像を修正しようとしたマピールやドゥザンチらの著書の叙述にもやはり残っており、ドリユ作品の理解を歪めてきた。
- (27) 「『成人』という課題：1920 年代のモーリス・バレス受容をめぐる」 仏語仏文学研究第 4 号、1990 年。引用はそれぞれ JE, p. 94; GM, p. 61
- (28) FSF, p. 9
- (29) ECP, pp. 80-81
- (30) 1932 年のアルゼンチン旅行については下記。SF, p. 280 ; Andreu et Grover : *Drieu la Rochelle*, Hachette, 1978, pp. 242-246 1944 年 11 月 8 日の『日記』でドリユはこの旅を「二度目の」転機と考えた。「わたしはどうやら 1934 年頃に共産主義者になり損ねたらしい。」この日の叙述も里程標テキストといえる。
- (31) 超党派議員調査団委員長による、2 月 9 日の共産党騒擾、12 日の社共ゼネストにも触れた下記の同時代資料がある。Bonnevay, Laurent : *Journées sanglantes de février 1934*, Flammarion, 1935
- (32) Winock, Michel : « Esprit » *Des intellectuels dans la cité 1930-1950*, Seuil, « points », pp. 110-114 1934 年 2 月 6 日事件に先立って、ムニエら『エスプリ』誌 (1932 年 10 月創刊) の中核から、ベルジュリとの共闘をもくろむ「第三勢力」グループが離脱していた。
- (33) ECP, p. 27
- (34) Balvet, Marie : *Itinéraire d'un intellectuel vers le fascisme: Drieu la Rochelle*, PUF, 1984 ; Pérusat, Jean-Marie : *Drieu la Rochelle ou le goût*

- du malentendu*, Peter Lang, 1977 : Reboussin, Marcel : *Drieu la Rochelle et le mirage de la politique*, Nizet, 1980
- (35) Sartre, Jean-Paul : “Qu'est-ce qu'un collaborateur” in *Situation III*, Gallimard, 1949
- (36) 日記全文は筆者の訳でメタログから 1994 年に出版された。主要研究書・論文を挙げる。Hebey, Pierre : *la Nouvelle Revue Française des années sombres 1940-1941*, Gallimard, 1992 ; Richard, Lionel: “Drieu la Rochelle et la Nouvelle Revue Française des années noires” in *Revue d'Histoire de la Seconde Guerre Mondiale*, 97, jan. 1975, pp. 67-84 拙論「ドリユウ・ラ・ロシエルの『日記 1939-1945』没後刊行の意義」『成城文藝』142, 1993 年および「ワイマールへの旅～1941 年 11 月第一回ヨーロッパ作家会議についての覚え書き」『ヨーロッパ文化研究』13, 1994 年
- (37) NPCS, p. 171 1940 年 6 月執筆。また、『日記』1940 年 6 月 22 日の記述にも、「1940 年、それはフランスとイギリスで矮小化された合理主義精神の完敗である」という一節が見える。
- (38) この評論に依拠した最近の研究は下記。Leroy, Géraldi : “Drieu la Rochelle journaliste politique sous l'occupation” in Dambre, Marc (dir.) : *Drieu la Rochelle écrivain et intellectuel, actes du colloque de 1993*, Presse de la Sorbonne nouvelle, 1995
- (39) CP, p. 226, 231
- (40) 「ヒトラーはスターリンのために、ドイツで少し露はらいをしたわけだ。」『日記』1994 年 8 月 3 日
- (41) 拙訳, 585 頁
- (42) “Entre l'hiver et le printemps” in SE, pp. 159-170 すでに 1964 年刊行の文芸評論集に収録されて戦後のドリユ読者に知られていたにもかかわらず、このテキストはさして重要視されてこなかった。ほぼ同時期のカミュの『シーシュポスの神話』のカフカ論が「ユダヤ系作家」を論じたがゆえに事前検閲で全文差し替えの憂き目に遭ったことを思えば、旧約の予言者への言及が『新フランス評論』に許容されたのは驚きである。
- (43) MF, p. 29
- (44) ここまで引用は SE, pp. 159, 164-165, 166, 167, 162
- (45) SE, p. 161 この箇所は 1935 年に『新フランス評論』に発表され、第二次世界大戦中にドリユが手を入れて出版を期した短編「二重スパイ」のつ

後期ドリュ・ラ・ロシェルの像の確定に向けて

ぎのテキストと完璧に符合する。「わたしは季節の道具です。」“L'Agent double” in *Histoires déplaisantes*, Gallimard, 1963, p. 122 この作品のブレオリジナルとの異同を指摘してくれた成城大学大学院博士課程後期学生、吉澤英樹君に感謝する。

(46) SE, p. 169

(47) Hines, Thomas More : *Le Rêve et l'Action. Une étude de « L'Homme à cheval » de Drieu la Rochelle*, French Literature Publications Company, Columbia, USA, 1978 ; Christensen, Peter G. : “Revolution in Drieu la Rochelle's The Man on Horseback and D.-H. Lawrence's The Plumed Serpent”, in *Revue de Littérature comparée*, 4/1992, pp. 397-405